



私の
なんとか
しなきゃ!

Vol. 90

PROFILE

1980年にNHK連続テレビ小説「なっちゃんの写真館」で主演デビュー後、映画やドラマに多数出演。女優業だけでなくニュース番組のキャスターや音楽番組の司会など、多方面で活動している。旅や美術などに関するエッセイも手掛け、1990年に訪れたアマゾン川をさかのぼる1か月半の旅の記録『濁流に乗って一欲望の大河アマゾン』をはじめ、著書多数。2008年より、JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストの審査員を務める。写真は、2017年度エッセイコンテストの表彰式にて。

私が初めて開発途上国と接点を持ったのは32歳のときです。自然保護がテーマの番組の企画で、1か月半にわたりアマゾン川流域を取材しました。当時、ニュースのキャスターを務めていた私は、1分1秒との闘いの日々はどこかストレスを感じていたのだと思います。お話をいただいた瞬間に「行ってみたい」と思ったのです。

恐らく番組の制作側は、普段ハイヒールにスーツ姿の私が突然アマゾンに放り出されたらどうなるかというギャップを狙っていたと思いますが、ふたを開けてみたら、意外にも自分が現地の生活に適應できることが分かったのです。朝は川の水がきれいな場所を探して水浴びや洗濯を、食事は川で釣ったピラルクやピラニアを調理し、夜は虫と闘いながら寝袋で寝る。正直、生活は過酷でした。でも、完熟トマトのように真っ赤な夕日や、対岸が見えないほど豪快な川の濁流など、辛い出来事を忘れ去ってしまうような感動にたくさん出会えたのです。都会の生活とは

文章で思いを分かち合う

女優、エッセイスト 星野 知子

HOSHINO Tomoko



©Shinichi Kuno

掛け離れた手付かずの自然を肌で感じ、自分自身の新しい一面を発見できたことにも喜びを覚えました。

それ以来、パルーの遺跡発掘現場や、ブラジルのスラム街「ファバーラ」、シリアの石鹼職人など、40か国以上で取材を行いました。テレビの取材では、取材対象者の生活など現地のさまざまな実情への配慮が必要となり、放送できない部分も少なくありません。例えば、アマゾンで森林を伐採する人々を撮影していたとき、彼らにカメラのコードを引き抜かれ、「仕事をクビにされるかもしれないから顔を写すな」と大声で詰め寄られたことがありました。また、1か月以上かけて取材したものが2時間の映像に編集されるのはよくあること。しかし、放送されなかった部分に本当に大切なことが隠されているときもあります。テレビで伝えきれないことも含めた“私の視点での旅”を文章に残したいと思い、エッセイを書くことにしたのです。

題材は取材現場での体験から、秘

境で食べた料理、各国のトイレ事情までさまざま。文章には読んだ人自身が想像を膨らませられる良さがあり、それこそが旅を分かち合うことだと思います。面白いと感じたり、行ってみたいと思ったりしてくれたら何よりです。

10年前から、中学生と高校生を対象にしたJICAのエッセイコンテストの審査員も務めています。エッセイはその時代を映し出しており、最近では、途上国を訪れた経験を軸に、日本の身近なところからボランティアなどに取り組みむ学生が多いように感じます。若者ならではの迷いや揺らぎを持ちながらも、いろいろなことに挑戦して掴んでいく——そんな姿を感じられる作品に出会うことを、これからも楽しみにしています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索